



北のウォール街「経済」

小樽の経済的な繁栄は、江戸期の北前船にまで遡る。北前船とは木造で小型の帆船で、寄港地で商いをする事で大きな利益を生んだ。最盛期は大坂を出発し、瀬戸内海から下関を回り、日本海沿岸の港を経由しながら蝦夷地まで達した。物品の売り買いを行ったのみならず、各地の情報をいち早く収集できたため、優れた北前船主は巨万の富を築き上げた。明治期に入ると欧米化が推進され、新政府の政策により木造船による活動が制限されるものの、北前船は明治の終わりまで大いに活躍した。

北前船の賑わいを現在に伝える建築が、木骨石造の倉庫群である。倉庫を経営した北前船主として、小樽倉庫の西出孫左衛門と西谷庄八、大家倉庫の大家七平、広海倉庫の広海二三郎らがいる。倉庫は単に三角形の切妻屋根ではなく、棟飾りの鯨、鬼瓦や妻面に刻まれた「印」、越屋根やアーチから当時の北前船主の勢いを感じられる。

もう一つ、当時の小樽の活況を今に伝えるのが銀行建築である。小樽の好景気を見逃すまいと、時に北海道庁を置く札幌に先んじて、本州資本の銀行が支店を設置した。建築的には、大正12年（1923）の関東大震災以降、全国で耐震性が重視され、主要建築に鉄筋コンクリート造が採用されていった。小樽の銀行建築もこの流れに含まれ、本州を本拠とする建築家や組織が設計を行い、最新の技術を導入していった。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 19 号

安田銀行小樽支店



小樽市色内 2 丁目 11-1 / 所在地
昭和 5 年 (1930) / 建築年
鉄筋コンクリート造 2 階建 / 構造

大正末期から昭和 10 年代中頃まで全国に建てられた安田銀行の支店は、小樽支店と同様な外観をしており、中でも小樽、神戸、横浜の 3 支店はよく似ていた。外壁中央にある 4 本の円柱は、古代ギリシャ建築に由来するもので、明治期以降わが国の銀行建築で多く用いられた。柱の間に縦長の窓を開け、両脇に壁を設けた外観が安田銀行の支店であった。簡素で力強い円柱とは対照的に、2 階開口部のアーチはリズムカルで、また開口部の持送り（壁から出て庇などを支える構造物）や軒下の装飾など、細部を丁寧に仕上げている。

立地も良く、小樽駅前から海に向かって下る中央通りと、色内通りが交わる角地に位置する。中央通り拡幅の際に曳家され現存しており、色内地区の歴史的な景観を形成する上では欠かすことのできない建築である。

現在 / 花ごころ

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 6 号

北海道銀行本店



小樽市色内 1 丁目 8-6 / 所在地
明治 45 (1912) 年 / 建築年
石造 2 階地下 1 階 / 構造

北海道銀行も、小樽に存在した他の銀行と同様、頻りに統廃合を繰り返してきた。それは、明治 27 年 (1894) 設立の余市銀行にはじまる。同 30 年に本店を小樽へ移し小樽銀行と改称し、39 年には北海道商業銀行を合併して北海道銀行となった。昭和 3 年 (1928) には百十三銀行を合併したものの、同 20 年の北海道拓殖銀行による合併で終焉を迎えた。なお、現在の北海道銀行 (昭和 26 年設立) とは無関係である。

外観はイタリアのルネサンス様式を応用した意匠である。連続するアーチ、玄関周り、窓周辺の石積み風デザインがそれである。様式建築に留まらず、モダンな印象も与える。見えない箇所にも手間がかけられ、防火のため屋根葺きの下地をコンクリートとしている。この点は、日本銀行小樽支店と同様である。設計は、辰野金吾の下、多くの日本銀行支店の設計に携わった長野宇平治 (1867~1937) である。長野は日本銀行技師として小樽支店を設計する傍ら、自宅で北海道銀行本店の設計をしていた。

現在 / 小樽バイン 北海道中央バス(株)本社ビル

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)
photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 16 号

越中屋ホテル

所在地／小樽市色内 1 丁目 8-25
建築年／昭和 6 年（1931）
構 造／鉄筋コンクリート造 3 階建



明治 10 年（1877）創業の越中屋は、明治 30 年代以降の英国の旅行案内書にも載った旅館で、この建物は外国人利用客用の別館として建てられた。戦中から戦後にかけて日本陸軍や米軍に接収された後、昭和 25 年（1950）に越中屋へ返還されたものの、相続税のために手放すこととなり、その後も所有者を変えながら現在に至る。建物は中央にある縦 2 列のベイウィンドウなど、垂直性の高い街中の鉄筋コンクリート造らしい外観である。ステンドグラスや丸窓の直線と幾何学模様は、アール・デコと呼ばれる 1920 年代を中心に世界的に流行したデザインの動向が反映されている。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 5 号

百十三銀行小樽支店



所在地／小樽市堺町 1-25
建築年／明治 41 年（1908）
構 造／木骨石造 2 階建

本店を函館とする百十三銀行が小樽に置いた、2 代目の支店である。角地に建てられ、隅切りして玄関を設けた都市的な建築である。当初の外壁は軟石が貼られており、現在とは正面から見た雰囲気が違うが、側面に軟石が遺されている。現在は店舗として改修されているものの、古代ギリシャ建築を模範とした正面の柱型と三角破風（ペディメント）など、100 年以上経った今でも、当初の銀行建築の面影を残している。

現在／小樽浪漫館

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 9 号

第百十三国立銀行小樽支店



所在地／小樽市堺町 1-19
建築年／明治 26 年（1893）
構造／木骨石造平家

寄棟屋根に棟飾りを載せた平家の建物は、一見すると銀行建築とは考え難い。しかし、開口部にキーストーンを設けたアーチ風のデザイン、軒の装飾的な持ち送り、軒下にある第百十三国立銀行の紋章である分銅模様など、確かにここが銀行であった痕跡を現在に残している。明治 30 年（1897）に株式会社百十三銀行へ改組・整備され、同 41 年に移転し木骨石造 2 階建の支店を新築した（百十三銀行小樽支店）。

現在／オルゴール海鳴楼

text 原 朋教（建築史家、工学博士）
photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 18 号

三菱銀行小樽支店

所在地／小樽市色内 1 丁目 1-12
建築年／大正 11 年（1922）
構 造／鉄筋コンクリート造 4 階建



我が国の銀行建築・オフィスビルの外観には変遷が見られ、色内地区でも確認できる。それは、明治から大正を中心とする古代ギリシャ・ローマ時代の様式建築の応用から、大正後期以降本格化する、鉄筋コンクリート造による直線による構成、という流れである。このビルは基本的には後者に属するが、1階部分には円柱が並べられており、その上部には歯型模様が廻らされるなど、変遷の過渡的な様子が認められる。

現在／小樽運河ターミナル 北海道中央バス(株)第 2 ビル

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 24 号

第一銀行小樽支店



所在地／小樽市色内 1 丁目 10-21

建築年／大正 13 年（1924）

構造／鉄筋コンクリート造 4 階建

第一銀行小樽支店は、外観が直線を中心に構成され、角を曲面とするなどモダンな印象を与える。しかし当初は 2 箇所の玄関に円柱を立て、壁面に彫刻が施し、華やかな銀行建築の佇まいであった。設計は田辺淳吉（1879～1926）で、清水組設計部長を辞して独立し、ヨーロッパの建築視察を経て設計されたものである。残念ながら田辺は独立後 5 年で亡くなってしまったため、現存する貴重な作品となっている。

現在／トップジェント・ファッション・コア(株)

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 25 号

第四十七銀行小樽支店



所在地／小樽市色内 1 丁目 6-25

建築年／昭和初期

構造／木造 2 階建

第四十七銀行は、明治 31 年（1898）に私立銀行として改組され、昭和 14 年（1939）まで存続し富山に本店を置いた銀行である。現在所有する北海道紙商事(株)は、後継の北陸銀行より建物を取得した。2 階建の小規模な建築ながら、4 本の二層分の円柱、玄関庇軒下の卵鋸模様と歯型模様を備えており、当時の典型的な銀行建築といえる。当初は内部を吹抜とし、戦前の銀行建築らしい空間が広がっていた。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 30 号

三井物産小樽支店



所在地／小樽市色内 1 丁目 9-1
建築年／昭和 12 年 (1937)
構造／鉄筋コンクリート造 5 階建

三井物産小樽支店は、向かいに建つ辰野金吾（1854～1919）設計の日本銀行小樽支店（明治 45 年）と対比的に、直線で構成されている。設計は横河工務所のチーフデザイナー・松井貴太郎。横河工務所は建築家・横河民輔（1864～1945）が設立した設計事務所で、合理的なアメリカ式オフィスビルの先駆となる建築を手がけた。玄関ホールの大大理石や正面両端の照明などに歴史の痕跡が遺っている。

現在／松田ビル

text 原 朋教（建築史家、工学博士）
photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 31 号

北海道拓殖銀行小樽支店



所在地／小樽市色内 1 丁目 3-1
建築年／大正 12 年（1923）
構造／鉄筋コンクリート造 4 階建

古代ギリシャ建築では、その外観が頂部、中間部、基壇部の上中下 3 箇所に分けてデザインされた。三層構成と呼ばれるこの設計手法は、19 世紀末のアメリカに端を発するオフィスビルでも踏襲され、北海道拓殖銀行小樽支店もこの方法で設計されている。中間部は柱型の間に上げ下げ窓を 2 箇所割り付けている。頂部は庇を廻し、柱頭風のデザインを見せ、窓を 3 箇所としている。

現在／ホテルヴィブラントオタル

text 原 朋教（建築史家、工学博士）
photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 38 号

中越銀行小樽支店



所在地／小樽市入船 1 丁目 1-2

建築年／大正 13 年（1924）

構造／鉄筋コンクリート造 2 階建

中越銀行は明治 27 年（1894）に富山で設立された銀行であり、北海道の支店第一号がこの建築である。昭和 18 年に北陸銀行と合併し、同 38 年に北陸銀行南小樽支店となった。外観はまず 2 階部分、窓列の壁に貼られた褐色のタイルと、一列に並べられた雷文の模様が目が行く。壁面のモルタル仕上げの目地も相まって、全体に横線が印象的な建築となっている。

現在／銀の鐘

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 69 号

小樽無尽(株)本店



所在地／小樽市花園 4 丁目 1-1
建築年／昭和 10 年（1935）
構 造／鉄筋コンクリート造 3 階建

無尽とは、一定の口数と給付金額を定め、抽選または入札を行い、金品を給付することをいう。日本では戦前、特に世界恐慌後に庶民向けの金融機関として発展した。この建物は、企業形態こそ無尽であるものの、当時の銀行建築の一つと考えてよい。それは、左右対称を意図した通り沿い 2 面の外観、玄関脇の柱型と柱頭、卵鍬模様などを用いた軒のデザインなど、古代ギリシャ建築を模範とした設計に現れている。

現在／おたる無尽ビル

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 17 号

共成(株)



所在地／小樽市住吉町 4-1
建築年／明治 45 年（1912）
構 造／木骨煉瓦造 2 階建

明治 24 年（1891）創業の共成(株)は、道内有数の精米・米穀商であった。建物は小樽七差路、かつての有幌倉庫群入口に面している。銅板葺のマンサード屋根を乗せた社屋は、石積みによるアーチ付きの窓枠がリズムカルに並ぶ。正面玄関は、古写真をもとに復原したものである。窓は 3 重で、外に上げ下げ窓、中央に鉄製の引戸、内に両開き窓を納めており、防火に配慮したものと思われる。併設の倉庫は木骨石造で、当初は 2 階建であった。

現在／（株）小樽オルゴール堂

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 40 号

通信電設浜ビル

所在地／小樽市色内 1 丁目 2-18
建築年／昭和 8 年（1933）
構 造／鉄筋コンクリート造 4 階建



倉庫が立ち並ぶ運河沿いであって、端正な姿が目を引く建築。色内地区の建築に見られるように、当時の銀行建築や社屋には窓上部にアーチが用いられるが、このビルは左右対称な外観で、4階までつながる窓の縦枠と相まって特に美しい。花崗岩による玄関庇や照明が組み込まれた円柱、扉や欄間など、玄関廻りのデザインも見逃せない。

現在／協和浜ビル

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.